オランダ・ドイツ研修を通して考えたESD

広島大学大学院教育学研究科　博士課程前期　須谷弥生

１．研修参加の目的

持続可能な社会の実現に向けて，教育は大きな期待を背負っている。それがESDという概念である。そして，今日の学校教育ではESDの推進が求められている。教育に携わる者は，ESDを展開していくために「ESDとは何か」という問いをまずは自分自身の中に立てることが重要である，と私は考える。そして，その問いに対する答えを見つけることは，その必要性を，身をもって体感することにより可能になるのではないかと考えた。これが，本研修参加の目的である。

２．研修内容

今回の研修では，オランダ自然史博物館，風車博物館，アンネフランクの家，ドク・ツェントルム，ナチ党大会跡地，旧ニュルンベルク市街，ダッハウ強制収容所，リーム地区を訪れた。その中でも，ドク・ツェントルムとダッハウ強制収容所は，強烈な印象を私に残した。近づくにつれて重たくなる空気，なんともいえないオーラを放ち，そこにある歴史の重みを感じさせる建物。それは，私自身が，かつて起こった悲惨な出来事の数々を知っているからこそ感じるものなのかもしれない。しかし，社会科の教科書に載っている写真が，実物として目の前に立ち現われて来た時，異様な何かを感じざるを得なかった。

私たちは，歴史から何を学ぶことができるのだろうか。この問いが自分自身の中を何度も駆け巡り，しばらくの間一人悶々と思考の世界に入り浸っていた。ユダヤ人であり哲学者であるハンナ・アレントは，その著作『イェルサレムのアイヒマン』の中で「凡庸の悪」について言及している。アレントはアイヒマン裁判を経て，これほどまでに悲惨な状況に至ったのが，特定の悪人によるものではなく，ほんの普通の人びとが考えることを止め，ただ指示に従った結果引き起こされたためであると気づいた。多くの人が考えることをやめること，このことこそがあまりにも大きな悪に結びついてしまったのだと，アレントは考える。

このアレントの思想を踏まえると，私が今目の前にして異様なものとして味わっているものは，当時のドイツ人の人びとにとってはハイ

パーインフレーションから抜け出そうとする，一つの希望の光であったのかもしれない。同じものでも，起こっている時と，起こった後に価値づけられたものでは，捉えられ方が随分と変わってしまうものなのだ。このことは，現代の私たちも「凡庸の悪」を，今まさに引き起こしている可能性があることをも揶揄している。ESD において，環境問題や平和問題の解決に向けた取り組みは不可欠であるが，そればかりでなく，「自分自身で考えることのできる人間を育てること」の必要性が感じられた研修であった。

３．ESD に関する今後の取り組み

本研修を通して，ESD の必要性を，身をもって感じることができた。そして，その身体性を伴った経験を踏まえて，「ESD とは何か」ということについて，既に定められている定義としての文言を超えて，自分自身で考えを深めることができた。私自身はまだ学生であるため，今すぐに授業の中で取り組みとして導入することは出来ない。しかし，ESD は自身の研究に大きく関係しており，それは直接的に扱っているわけではなく，その背景に静かにではあるが大きく佇んでいる概念である。よって，本研修での経験をつねに頭の片隅に置き，引き続き自分自身の研究を進めていくことが，ひとまずの ESD に対する今後の取り組みになると考える。また，研究生活を共にしている大学院生とともに，この ESD について議論を深めていくことも，私自身の今後の課題となる。

しかし，ESD としての体裁をもった実践に限らず，本研修において私自身の内部で起きた変化が，自身の行動の変容，思考の変化，それに伴う周囲に及ぼす影響の変化として現れているのではないだろうか。むしろそれこそが，本質的な ESD の実践なのかもしれない。

本研修では現職の先生方とともに数日間過ごさせていただいた。教育現場の話や ESD の実践についてお伺いすることができ，大学の中だけでは得られない非常に貴重な機会を得ることが出来た。